

Title	美術批評におけるフォーマリズムの展開：イギリス、日本、アメリカ
Author(s)	川田, 都樹子
Citation	大阪大学, 2002, 博士論文
Version Type	
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/43262">https://hdl.handle.net/11094/43262</a>
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉</a> 大阪大学の博士論文について <a>〉</a> をご参照ください。

***Osaka University Knowledge Archive : OUKA***

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

氏名	かわ 川 た 都 樹 子
博士の専攻分野の名称	博 士 (文 学)
学位記番号	第 1 6 6 8 1 号
学位授与年月日	平成14年3月12日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
学位論文名	美術批評におけるフォーマリズムの展開 —イギリス、日本、アメリカ—
論文審査委員	(主査) 教授 神林 恒道  (副査) 教授 上倉 庸敬 助教授 藤田 治彦

#### 論 文 内 容 の 要 旨

フォーマリズムの美術批評とは一般に、視覚芸術作品の形式的要素に注目し、その分析を通じて作品を評価しようとするものと解されている。本論文はフランス十九世紀末の象徴主義の画家ドニに始まる、このフォーマリズム批評がイギリス、日本、アメリカのそれぞれでどのように受容され、また変容し、展開していったかを歴史的に検証しようとしたものである。

全体は6章から構成されており、「第1章 モーリス・ドニ／ロジャー・フライ／クライヴ・ベル」では、ドニの有名なアフォーリズムから始まったフォーマリズム批評が、フライとベルの二人によってどのように理論として形成されていったかを論じている。同時に「フライ＝ベル」と並称されながら、実はこの両者には注目すべき差異があることを指摘する。「第2章 白樺派とブルームズベリー・グループ」では、フライとベルが属していた「ブルームズベリー・グループ」と日本の「白樺派」の関係を取り上げ、この二つのグループを仲介したバーナード・リーチを通じて、フォーマリズム批評がどのような形で紹介され、受容されたかを論じている。「第3章 近代日本におけるフライとベルの受容をめぐる」では、白樺派以外での日本におけるフォーマリズムの受容の動向について触れている。しかし現代的な視点から重要なのは、第二次大戦後のアメリカの批評原理を形成する上で果たしたフォーマリズムの役割である。「第4章 戦後アメリカの『セザンヌ』受容から」では、「アメリカン・フォーマリズム」の批評スタイルの原点となった、ハンス・ホフマンの理論の問題点を分析し、そこからフォーマリズムの批評原理を確立したグリーンバーグの理論がいかなるものであったかを検証している。さらに近年の研究の動向である、その「ユダヤ性」についても言及している。ところで、今やフォーマリズムの時代は終わったと言われている。果たして、普遍的な「美的価値」について語ることは、現代においてもはや不可能なのだろうか。「終章 フォーマリズム超克の試み」は、この問題に関わる今日の芸術作品や批評の現状、その中においてフォーマリズムを修正し超克をはかることが可能なかを問うものであり、論者はここでは、現代アメリカにおけるカント美学の研究者、クロウザーの理論を援用しつつ、現代におけるフォーマリズムの新たな可能性を尋ねている。

## 論文審査の結果の要旨

これまでフォーマリズムの原点として、ドニのアフォーリズムが当然のごとく挙げられてきたが、論者はこの神話が、イギリスにおけるフォーマリズム批評理論が形成された時点から跡づけられたものであること、「フライ＝ベル」の理論と称されながら、両者に決定的な差異があることを、きめ細かな資料の読解によって明らかにしている。漠然とフォーマリズムと呼ばれてきた理論の相互間のずれを解明したことが、この研究においてまず評価されるべきことであろう。

フライの命名になる「ポスト印象主義」が、白樺派によって日本に紹介されたことは良く知られているが、これがフォーマリズムとしてではなく、むしろ表現主義＝天才主義として受容されたことを、論者は指摘している。しかも反印象主義であるはずの「ポスト印象主義」がいつの間にか「後期印象派」という、明らかな誤訳によって定着してしまったのである。この間の経緯は、これまで不問に付されてきた。論者はこの問題を、岡倉天心から始めて、上田敏、長谷川天溪、内田魯庵、石井柏亭に至る歴史的資料を洗い直すことによって明らかにしようと試みている。この研究成果は広く注目されてよい。

フォーマリズムの批評理論が今日、関心を集めているのは、これがアメリカに受容されて以来のことである。しかしここにも、受容に際しての解釈のずれ、時として誤解といったものが混入している。論者はその発端を、ハンス・ホフマンの美術論に見出している。フォーマリズム批評を代表する人物といえ、だれもがクレメント・グリーンバーグを挙げるが、その根底にあるのが、かつて師であったホフマンの理論であるという。この指摘は、グリーンバーグのフォーマリズムの本質を見極める上できわめて重要である。

さらに論者は、グリーンバーグがその理論を構築するに際して影響を受けたクローチェの美学、あるいはヴェルフリンの美術史理論に触れている。グリーンバーグの批評理論の分析は明快ではあるが、いささか平板に流れているのは惜まれる。絵画の質を重視するところにフォーマリズム理論の真骨頂があるのだが、多元的な価値観を標榜する昨今の芸術の状況に果たしてこの理論は妥当するものなのか、あるいは超克されるべきものであるならば、それはいかにして可能となるのかが、最終章で取り上げられ、論じられている。

各章ごとに、それぞれ注目すべき重要な指摘が認められるが、「展開」というタイトルにしては、全体を貫く理念が今ひとつ判然としない。むしろ「変容」として、このフォーマリズムの拡がりを捉えるべきではなかったかと思う。しかしこの研究が、今日の批評理論の在り方を考える上で、大きな問題を提起していることは、高く評価されてよいであろう。よって本審査委員会は一致して、ここに本論文を博士（文学）の学位を授与するに値するものであると認定する。